

近現代国家の力による共同体の再編  
—台湾・新店溪流域の原住民と漢人集落の分析を通して—

2025.02.04（火）  
中谷礼仁建築史系研究室  
千年村ゼミ  
522A069-4 張沛齊

【論文構成】

【序論】 第1章 本研究について

1.1 研究の背景と目的

1.1.1 「千年村研究」の文脈と展開

1.1.2 東アジア千年村研究における台湾の視座

1.1.3 研究課題と目的

1.2 既往研究

1.2.1 「千年村研究」の研究手法

1.2.2 東アジア海陸空間における台湾の文脈

1.2.3 社会および集落発展を理解する理論

1.3 本研究の位置付け：東アジア千年村の展開

1.4 本論の構成

【本論】 第2章 台湾の「古集落」における歴史的分布と変遷

2.1 はじめに

2.1.1 「大航海時代」以前の台湾部落社会

2.2 オランダ・スペイン統治時代

2.2.1 文献「蕃社表」と「古地図」

2.2.2 既往研究と妥当性の検討

2.2.3 プロットと分析

2.3. 鄭成功から清国時代

2.3.1 文献「十八世紀末台湾原漢界址図」

2.3.2 既往研究と妥当性の検討

2.3.3 プロットと分析

2.4. 日本統治時代 29

2.4.1 文献「高砂族調査書」、「高砂族授産年報」紹介

2.4.2 既往研究と妥当性の検討

2.4.3 プロットと分析

2.5 戦後台湾：山地の水源保護、そして原住民族の課題

2.6 小結

【本論】 第3章 原漢混成集落の構成と変容：新店溪流域における現地調査

3.1 はじめに

3.2 調査対象の選定

3.1.1 地理範囲と上下流の差異

3.1.2 本流域の特徴

3.1.3 スケールの選択：「里／村」

3.3 調査成果

3.4 小結

【本論】 第4章 考察

4.1 東アジア大地における台湾の連続性

4.1.1 地形：プレート境界に位置する台湾

4.1.2 地質：東アジアの古第三紀地質層に位置する台湾

4.2 近・現代国家からもたらす交通・地域経営

4.2.1 交通の変化

4.2.2 地域経営の変化

4.3 小結

【結論】 第5章

参考文献

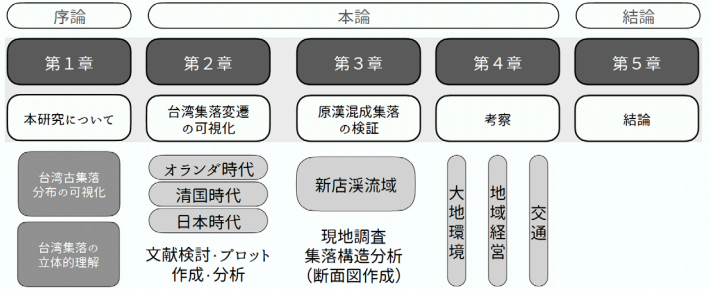


図1 本論文の構成

1.1 【研究背景・動機】

1.1.1 千年村研究の背景と展開

2011 年以降、早稲田大学中谷研究室は「千年村研究」を展開し、古代地名比較を基に千年単位存続する集落の立地・構造・持続要因を分析してきた。日本国内では『和名類聚抄』（962 年）を基準に長期的存続性を強調し、近年は北海道、沖縄、朝鮮半島、中国にも調査を拡大。地域間比較により、地理条件や歴史的背景、集落存続の多様な戦略が明らかになり、人間と環境の長期的相互作用の理解が深まっている。

1.1.2 台湾を研究対象とする意義

台湾の記録は約 400 年に限られるが、海洋と大陸の交差点として民族移動と政権交替が頻繁に発生し、集落発展は「高い変動性」を示す。閩南人・客家人・原住民族が外来政権の影響下で土地を再編し、多層的な集落分布を形成してきた。この変動性は「千年村研究」の強調する「長期存続性」と対照的であり、台湾の事例は政権交替や境界変動が集落発展に及ぼす影響を検討する新たな視点を提供する。

1.1.3 研究課題と目的

台湾の集落研究は政権主導や資本拡張を重視する傾向があり、民族間の相互作用や原住民族の空間認識が十分に考察されていない。本研究では、「原漢混成流域」の集落構造を観察対象とし、以下の課題に取り組む。

①台湾集落の長期的発展傾向の解明

約400年の史料を用いて、各時代の発展経緯と空間分布を把握し、「継続性」と「断絶性」を比較する。

②高い変動性の要因分析

政権交替や民族間の資源争奪・調整が集落発展に与えた影響を検討する。

③現存集落の調査と分析

現地調査・文献分析・インタビューを通じ、台湾集落の特性を描き、東アジアの長期存続性研究への示唆を探る。

本研究は史料比較と空間分析を用いて台湾集落の進化を明らかにし、「持続性」と「変動性」の対照を示すことで、東アジアの長期的集落研究に新たな視点を提供することを目指す。

1.2 【既往研究】

上記の問題に対処するため、本論文では以下の三つの観点から関連研究の文脈や理論ツールを参照し、それらが研究課題への応答にどのように寄与するかを説明する。

2.1 長期発展の視点からの集落研究：「千年村研究」

中谷研究室では、古代文献に記された地名の比較を通じ、千年単位2で集落が存続しえた地域の位置を特定し、その立地条件や開発史、集落構造の変遷と持続性を探究する。なお、生存する者は同一の氏族とは限らない。

このアプローチは、「長期的持続性」の概念を強調し、集落が自然環境や社会的課題にどのように適応し、文化を保持してきたかを解明している。

■東北地方の阿仁川流域における少数民族（アイヌ）の上下流集落の相互作用や、チベット高地の多民族構成による流域共同体は、厳しい地理環境に対して、集落間の協力によって柔軟に適応し、多層的な社会ネットワークを形成していることを示している。

（東野友紀、2021；ドルマ、2024）。

▷台湾の約 400 年の文字記録と多民族の相互作用という状況を「長時段」の視点で考察する際の参考となり、「高い変動性」の中に潜む空間的な継続性を見出す手がかりを提供する。

2.2 東アジア海陸文脈と台湾の歴史

台湾の地政学的役割：海陸交差の歴史的視点

■若林正丈は、17 世紀以降の台湾が「海のアジア」と「陸のアジア」の境界として機能し、海洋勢力と陸上勢力の引っ張り合いを受けてきたと指摘している。また、戦後の国民党政権下で「台湾認識」が新たに形成されていったことを論じている。

▷東アジアにおける海陸の文脈の変遷は、台湾集落の空間分布や民族の長期的な傾向に反映されており、これらの進化が地理的・政治的軌跡を維持しているかを検証する枠組みを提供する。

■佐々木高明が提唱した「照葉樹林文化論」は、東アジア特有の森林利用、農耕様式、社会組織を、人間文化と生態系の交錯から探求したものである。

▷この理論は、異なる民族や現代国家の境界を超え、大地環境に基づく共同かつ連続的な生存の原型を見出そうとする視点を提供している。台湾の地理的条件や生態的基盤が、各民族の土地利用や集落配置にどのように影響を与えたかを解明する。

2.3 社会および集落発展を理解する理論

■柄谷行人は、交換の形式を「互酬の原始部族」「貢納の前近代国家」「商品交換の資本主義」の三つに分類し、経済的交換と政治的権力を理解する枠組みを提示している。

▷台湾原住民族は互酬モデルに近い形で部落を維持しており、漢人社会は貢納と資本主義の両属性を兼ねる。これらの中で生じた衝突や交渉が、空間的「変動性」を形作る過程を説明する。

1.3. 本研究の位置付け：東アジア千年村の展開

本研究の目的：

① 台湾における集落空間発展の長期的傾向と特性

（古代集落の可視化）

② 現存する多重族群を反映する集落空間の調査と分析（集落の具体像）

③東アジアに関する繋がりこと（大地の連続性）

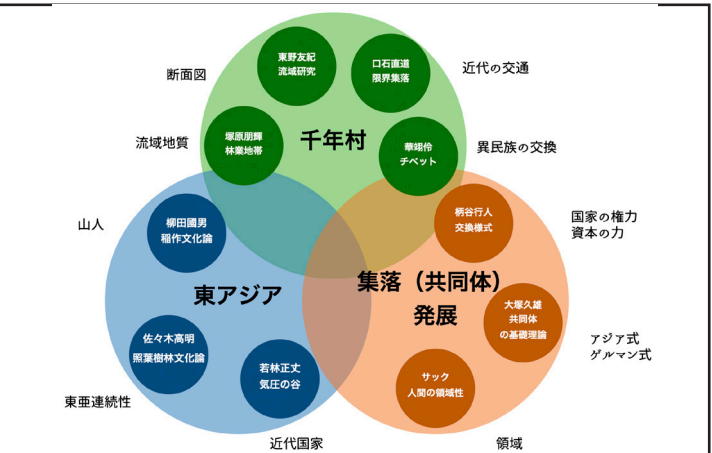


図2 本研究の位置付け

2 【台湾における原漢境界空間の成立】

台湾の歴史は 16 世紀の「大航海時代」以降、外来政権の影響を受けながら形成されてきた。ヨーロッパ人の航海記録から始まり、オランダ・スペインの統治、清国の版図編入、日本の植民統治を経て、戦後の国民党政権による開発と土地政策の変遷が、集落の分布や境界の形成に影響を及ぼした。

2.1 地理的特徴と境界空間の形成

台湾はフィリピン海プレートとユーラシアプレートの境界に位置し、山脈が縦断する険しい地形を持つ。

河川の短・急・峻な流れは、地域間の交通や経済活動を制約し、各流域ごとの社会発展を分断した。

平野と盆地は農業開発の中心となり、漢人移民の主要な定住地となった。

山岳地帯は原住民族の伝統的な居住地として機能し、後の境界政策に大きな影響を与えた。

2.2 多民族社会の歴史と境界の変遷

台湾の民族関係は時代ごとに変化し、「漢蕃界」や「隘勇線」などの制度を通じて空間が再編成された。

①オランダ・スペイン統治時代（17 世紀）

西南部のオランダ統治下では平埔族の「蕃社」が記録され、沿岸部の交易ネットワークが形成された。スペインは北部に拠点を築き、海洋交易と宗教布教を推進した。

②鄭氏政権と清国統治（17 ～ 19 世紀）

鄭成功の軍屯による農地開発が進み、原住民の土地利用が制約された。清国の「漢蕃界」政策では、熟蕃（平地原住民）と生蕃（山地原住民）が区別され、原住民の生活空間は縮小した。

③日本統治時代（1895 ～ 1945 年）

「理蕃政策」により、武力と行政手段を組み合わせた原住民支配が強化された。

「集団移住政策」により、原住民は定住化を余儀なくされ、土地利用の在り方が大きく変化した。

④戦後台湾（1945 年以降）

水源保護区の指定や国立公園の設置により、原住民の狩猟や農業活動が制限された。経済開発が進む一方、山地地域の産業が衰退し、都市部への人口流出が加速した。

原住民族の権利運動が 1990 年代以降活発化し、伝統領域の再評価が進められている。



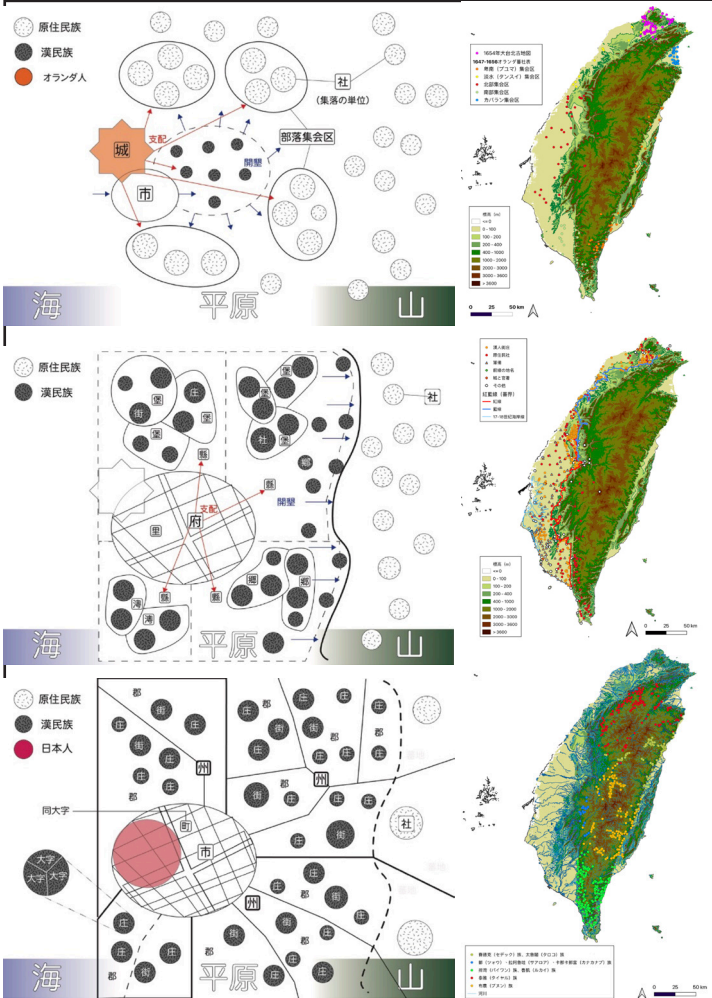


図3  
上：オランダ統治時代台湾集落構造と古集落プロット  
中：清国統治時代初期台湾集落構造と漢民族・原住民族集落プロット  
下：日本統治時代中期高山原住民族移住集落プロット

### 3【現地調査】

#### 3.1. 調査結果と分析

本調査では、新店溪流域の10集落（湾潭、直潭、小粗坑、屈尺、広興、亀山、忠治、烏来、信賢、福山）を対象に、以下の五つの観点から分析を行った。

#### 2.1 地理環境と集落立地

新店溪流域の集落は、地形や水系の影響を大きく受けている。上流域（信賢・福山）：標高が高く、険しい山岳地帯に位置し、居住可能な範囲が限られる。中流域（烏来・忠治・亀山）：川沿いの狭い谷間に形成され、交通の便が比較的良好い。下流域（広興・屈尺・小粗坑・直潭・湾潭）：沖積平野や丘陵地に位置し、農業に適した地形を有する。河川の流れや堆積地形は、集落の配置や土地利用の決定に大きな影響を及ぼしている。

#### 3.2 集落構造と住宅形態

各集落の建築形態や空間構造は、民族的背景や歴史的発展によって異なる特徴を示している。漢人集落（湾潭・直潭・広興）：伝統的な合院や赤レンガ建築が残るが、近年はコンクリート住宅への転換が進む。

原住民集落（烏来・忠治・信賢・福山）：日本統治時代以降、伝統的な高床式住居から木造平屋、近代的住宅へと変化。集落の配置：農業を基盤とする集落では、住宅が密集する傾向がある一方、原住民集落は地形に沿った分散型の構造を取る。

#### 3.3 産業発展と変遷

各集落の生業は、歴史的な開発政策や経済環境の変化によって大きく変容している。伝統産業：

湾潭・広興・小粗坑では農業（稲作・茶・果樹）が主要な産業として継続。亀山では水力発電が、烏来では林業がかつての主産業であった。産業の転換：日本統治時代には、森林資源の開発と水力発電所の建設が進んだ。戦後、水源保護政策の影響で農業や林業が衰退し、烏来などでは観光業へと転換。近年では、高齢化に伴い、農業の縮小や集落の経済基盤の弱体化が進んでいる。

#### 3.4 交通網と集落の関係

新店溪流域の集落は、交通の発展と密接に関わってきた。トロッキ軌道（日本統治時代）：林業・鉱業のために亀山から烏来にかけて敷設され、戦後は自動車道へ転換。幹線道路の整備：戦後、右岸に主要な道路が建設され、観光地（烏来）へのアクセスが向上。

交通の影響：

交通インフラが発展した地域（烏来・亀山）では観光業が成長。交通が不便な地域（福山・信賢）では、人口減少が進行し、経済基盤が弱体化。

#### 3.5 社会文化と宗教信仰

各集落には、歴史的背景や民族性に応じた信仰文化が根付いている。漢人集落：湾潭・広興・屈尺では道教や仏教の廟が集落の信仰の中心。原住民集落：忠治・信賢・福山ではキリスト教の影響が強く、教会が集落のコミュニティ形成において重要な役割を果たす。観光化の影響：烏来では「原住民文化」の演出が進むが、観光向けに簡略化された側面が見られる。

#### 3.6 まとめ

本調査により、新店溪流域の集落は、地形や水系に適応しつつ、それぞれの歴史や社会構造に応じた発展を遂げてきたことが確認された。また、産業の変化や交通インフラの発展によって、集落の経済構造や社会文化が大きく影響を受けていることが明らかとなった。

| 時代対照（日本）      | 近世                 |                    | 近代                      | 現代                                       |                                                 |                       |
|---------------|--------------------|--------------------|-------------------------|------------------------------------------|-------------------------------------------------|-----------------------|
| 時代（台湾）        | オランダ・<br>スペイン統治時代  | 鄭氏統治時代             | 清國統治時代                  | 日本統治時代                                   | 中華民国時代                                          |                       |
| 西暦            | (1624~1662)        | (1662~1683)        | (1683~1895)             | (1895~1945)                              | (1945~)                                         |                       |
| 共同体の主體性       | 原始部族から<br>西洋植民の属地へ | 中国王朝の「辺境」から「一省」へ   | 日本帝國の「外地」として            | 中華民国唯一の「一省」<br>事実上の独立国家として               |                                                 |                       |
| 行政単位          | 上<br>↓<br>下        | 府州（縣）<br>坊里        | 省<br>府縣<br>堡里鄉澳<br>街庄社廳 | 1920以前<br>廳縣<br>堡里<br>街庄<br>大字<br>小字（土名） | 1920以後<br>（日本に対照）<br>府縣<br>都市<br>町村<br>大字<br>小字 | 縣/市<br>鄉/鎮/市/區<br>村/里 |
| 集落の支配主体       | 部族社会               | 漢民族—（宗族）<br>原住民—部族 |                         | 台湾總督府                                    | 土地所有者                                           |                       |
| 土地所有の性格       | 原住民—共有制<br>私有制     | 原住民—共有制<br>私有制     | 原住民—共有制<br>私有制          | 原住民—共有制<br>私有制<br>国有制                    | 私有制<br>国有制                                      |                       |
| プロット史料        | 番社表<br>大台北古地図      | 十八世紀末台湾原漢界社図       |                         | 高砂族調査書に反映する「集居移住」                        | 『台湾地名辞書』                                        |                       |
| 原住民と漢民族の領域・境界 | 原<br>漢             | 原<br>漢             | 原<br>漢                  | 原<br>漢                                   | 原<br>漢                                          |                       |

図6 台湾歴代の土地区画所有と幻獣民族—漢民族境界集落の構造分析

### 4【考察】

#### 1. 東アジア大地における台湾の連続性

【台湾と日本の地質的連続性】台湾は琉球海溝に沿って北東方向に伸び、日本の宮崎・徳島・和歌山など同様の地質特性をもつ。これらの地域は林業が盛んな「南海林業地帯」と呼ばれ、史料には「遊動民族」や「異族」と関わりの深い地域としても記録されている。新店溪流域でも奈良・吉野出身の資本家が山林開発を手掛けるなど、この地質的連続性が集落の発展や地域経営と深く結びついている。

#### 【平地と山地の集落分布との関連】

台湾の山岳地帯（高山族）と平地（平埔族+漢人居住地）は、地質特性に呼応するように分布が異なる。平埔族は定住・定耕が中心の漢人の生活様式に適応しやすく、結果的に同化が進んだ可能性がある。これらの事例から、地質・地形条件が古くからの林業・遊動生活だけでなく、近代以前の原住民族と漢人の居住形態や同化の在り方にも大きな影響を与えてきたことが示唆される。

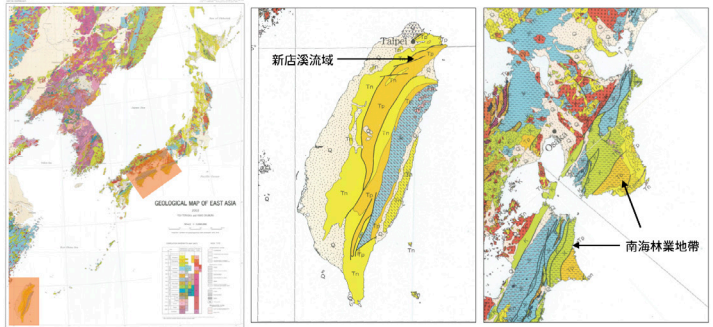


図7 東アジアの大地連続性を表す台湾山間部と日本内海林業地帯

#### 4.2 近・現代国家からもたらす交通・地域経営

新店溪流域の集落は、政権交代や外部の政策により交通や地域経営が変化し、歴史的連続性に乏しい傾向が見られる。

#### 【交通の変化】

かつては船運で台北市街と結ばれていたが、橋や道路の整備が進み渡船は廃止。日治期にはトロッキ鉄道や山道が整備され、林業用の木材運搬に使われた。戦後は林業の衰退や水源保護によりトロッキなどは撤去。現在は道路交通が主流。

#### 【地域経営の変化】

日治期：上流で水力発電や林業、下流で茶葉生産が進行。戦後：水源保護政策により上流の農林業は規制され、観光が主要産業に。原住民集落は定住化・定耕化が進み、狩猟や焼畑など従来の生活様式は制限。観光開発で原住民文化が演出される一方、実際の生業や伝統との乖離も大きい。下流は茶葉生産などで近代化が進んだが、水源地規制で全体的に産業は衰退傾向。



図8  
台北水源特定区範囲図

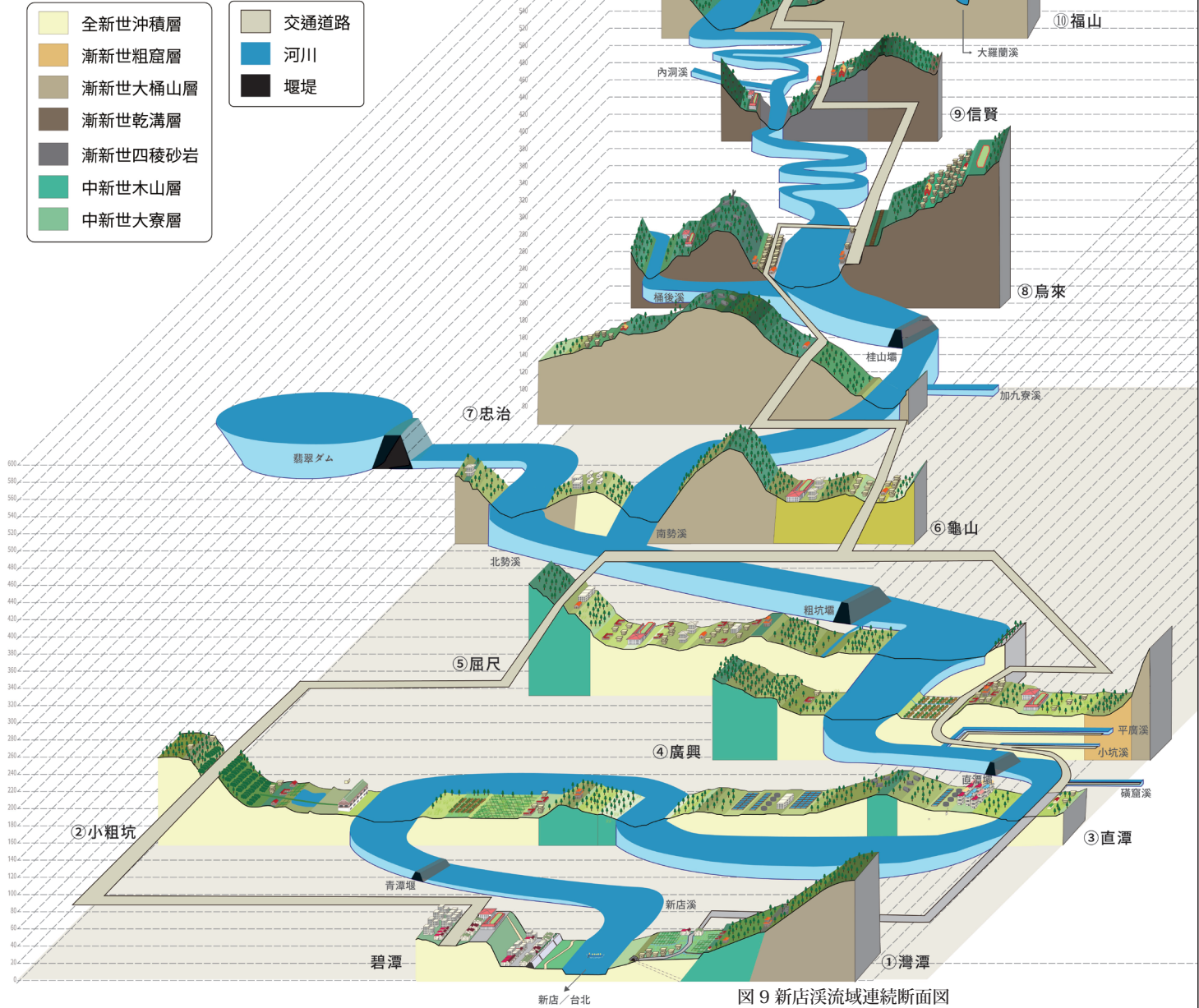


図9 新店溪流域連続断面図

### 5【結論】

本研究は、「千年村」研究の方法論を台湾の文献不足地域に適用し、以下の成果を得た。

#### 1 方法論の拡張

「千年村」研究手法を用いて史料が限られる台湾でも、多角的な視点から集落発展史を再構築。

#### 2 集落分布の可視化

漢人と原住民族がどのような空間的・歴史的分布特性をもつかを整理し、両者の相互作用をより明確化。

#### 3 新店溪流域での検証

典型的な「文化融合地域」として詳細調査を行い、仮説や理論を具体化・検証。

#### 4 多角的要因の統合

政治境界だけでなく、地質・産業・交通・東アジアとの連続性など多方面から集落構造を考察。

総じて、台湾の漢人・原住民族集落の歴史的動態と地理的基盤を明らかにし、「千年村」研究の東アジア展開に新たな視点を示した点に意義がある。